昭和三年二月十六日第三種郵便物認可（毎月一日一回發行）

主筆　江原萬里

聖書の眞理

第五十八號

八月號

信仰のみと誠實なる信仰　主筆
外なる成功と失敗　江原萬里
神の自現（下）　江原萬里
ヱレミヤ記の研究　卷物の燒棄（上）
受難週間の研究　小栗襄三
柏木通信　齋藤宗次郎
祖父の書翰　江原萬里
社會と家族　福音の奇能
制度と社會的行動　主筆
我が國を救ふ基督教　身邊漫筆

昭和七年（1932）八月一日發行

我が國を救ふ基督教

今では西洋見物をしやうとせば、東京の銀座に「洋行」すれば足る。日本の西洋化は近來益々其の歩調を早めて來た。其の生活、其の思想、悉く舶來物である。都市の急激なる發達、郊外の大工場、黒煙天に漲り、數十萬の職工が往來する有樣を見れば、變りつゝある我が國の姿がありありとわかる。

日本民族の東洋に於ける發展も亦素晴らしい。その海軍は世界三大國の一、陸軍は支那大陸を威壓し、シベリアを脅して居る。僅々六十年間に此の大發達は西洋人を驚嘆せしめ、恐怖せしめて居る。日本人自身にさゑ豫想以上である。そも此の發展力は無限に續くのであらうか。

日本の此の發展は、日本人が巧に西洋化を行つたためであつた。使用した武器は西洋の現代文明であり、之を使するに便ならしめたのは日本固有の國情であつた。此の二つは今まで調和して來た。今後も調和して行けるであらうか。

我が國の發展史上一劃期をなしたものは世界の大戰であつた。此の戰爭は、不斷に上り來た我が國の發展力に榮冠を與へたものであつた。之に由つて我が國の東洋に於ける覇權は確立したのである。支那に對する我が國の位置が定まつた。然かも此の時以來、丁度働き盛りの年頃までは影を潜めて外部に顯はれなかつた内在の疾患が、健康に少しの弛みが生ずると同時に現はれて來るやうに、我が國固有の國情とその上に着飾つた西洋文明との矛盾が次第に二者の調和を破つて外部に顯はれて來た。

例へば、之を何人にも解し易い産業の方面について云ふならば、一體天然の資源に乏しく、殊に鐵と石炭との少ない我が國に於て、鐵と石炭とで維持せられる西洋の現代資本的生産を行ふことは無理である。早晩行詰は來るのである。その無理を強ゐて行ふとするから、滿洲が「生命線」となり、支那の渦亂に引込まれ易くなるのである。若し日本が武力を以て大産業國とならうとするならば、東洋の平和は益々紛亂し、滿洲は日本國民の重荷となり、決して所期の結果は得られない事は明白である。

又我が國は狹隘なる國土に、年々增加する過剩の人口を擁して苦しんで居る。どうしてかくまで人口が增加するのか。それは西洋式資本主義の産業を採用した結果である。大戰後工業の行詰と同時にその重壓が都市に農村に次第に強く感じられて來た。

此等は皆西洋文明と日本固有の國情との矛盾から來たものである。之がため、識者中明治大正の榮華は日本民族の長い歴史から見れば只一時の現象に過ぎずと觀るものも少なくない。

若し基督教が西洋の現代物質文明とその根源を同じくする者であるならば、之は我が國情に反し、國を救はない。若し基督教こそ我が國を救ふ唯一のものであるならば、今現に呻いて居る農民と都市の勞働者に新光明を與へ、新生命を供し、その生活に喜悅あらしめるものでなければならない。

又若し、我等基督者自身、それを經驗しないならば、その基督教は無意味である。若し自ら新生を經驗したならば、何故之を隣人に分ち、人生の喜悅を共にしないのか。我等は「僞善なる學者、パリサイ人」の宗教に飽いた。現在に生きた眞正の基督教を求める。

聖書之眞理
昭和七年八月一日發行
第五十八號

信仰のみと誠實なる信仰

主筆

神に義しとせられる途は只キリストを信ずる信仰のみ、此の外に何物をも不必要であると主張する者がある。否、只信仰と云ふだけではいけない、誠實なる信仰でなければならないと主張する者がある。二者何れが正しいであろうか。

私は爰に卒直に私の所信を表白する。私が神から義人として認められて居ると確信する所以は、私が只單にキリストを信じて居るからである。私が純眞であるかどうか、私のキリストに對する信仰が誠實であるかどうか、そんな事はどうでもよい。否、私が純眞でなく、「誠實なる信仰」を有ち得ないから、キリストに信賴するのである。而して此の信仰に由つて、明に私は神の義人たる確信を有するのである。

それ故に、私が神に義とせられ、靈魂が滅亡を免れ、體が榮化する、即ち永遠の生命を得る希望を有つのは、私自身の中に何物かゞあるからではない。神が私にキリストを賜ふたからである。彼は私の罪のため、私に代つて死に給ふた。私を非難する者よ、心せよ、君達が私に加へる誹謗は、キリストを刺しつゝあるのである。我が良心よ、汝が私を責めるその苛責は、十字架上キリストを苦しめ奉つたものである。汝は今も尙キリストを苦しめんとするか。現在の見すぼらしき私の境遇よ、失望する事をやめよ、キリストは私に代つて榮光の中に復活し給ふた。やがてその榮光が我が身に現はれる時が來る。

キリストが第二の私となり給ふたのである。舊き私はキリストが代つて死して下さつたのである。此の事實を事實として確信し、私の一切を擧げてキリストに生きる。此の信仰のみで澤山である。その信仰が誠實附きの信仰であるかどうか、私は知らない。幾パーセントの純眞があるか否か、私にはどうでもよい。私に生命懸けの事は、キリストが私になり代つて下さる事である。

自分の信仰が誠實であり、自分は純眞である時救はれると思ふ者は、キリスト以外に何等の善き者の存在を生れ乍らの自己に認めやうとする者である。若しそんな物が事實あるならば、キリストは十字架上私共のために死し給ふ必要はなかつた。彼は無益に死んだ宗教狂に過ぎなくなる。然し若し、自分の中に何の誠實も純眞もなくして、然かも之があると思ひ、之に賴つて神の救に與らんとするか。あゝ僞善者よ。己が誇を棄てよ。

外なる成功と失敗

事業が成功する事、人々に賞讃せられる事、富貴と幸福とが訪ね來る事、此等の外なる成功は基督者の基督者たる眞價の標準とならない。基督者が基督者として眞實にキリストの生命を宿し奉る時、人に棄てられ、事業に失敗し、貧乏に見舞はれ、病苦に惱む事は少しもその眞價を傷けない。否、之を機緣として益々其の眞價を發輝する。

基督者の眞價は、彼がどの位深くキリストの生命を宿し奉つて居るか、それに由つてどの位親しく神を父として之に服つて居るかで定まる。神の己に爲し給ふところを最善として悅び受け、常に感謝し、常に望み、「四方より患難を受くれども窮せず、爲ん方盡れども希望を失はず、倒さるれども亡びず、常にイエスの死を身に負ふ。これイエスの生命の我らの身に顯れん爲なり」之れだ。

神の自現（下）

江原萬里

天然の神

私は人間は如何に切に神を求めて已まないかを述べた。世の喧騒怒號、各人の嘆き悲しみ、之れ皆畢竟人類が言ひ顯はすべき言語を知らず、只わめき叫んで神を喚び求めて居る聲である。さらば神が眞に在し給ふならば、此有樣を見て見ず、その聲を聞いて聞かず、知らぬ振りを爲して居給ふであらうか。そも神は餘りに偉大であり、限りある我等の眼は無限の神の御姿を仰ぎ見る事能はず、地に在る我等の耳は天に在す神の御言を聞き得ず、土より出て土に歸る我等の心は神の永遠の御意（こころ）を悟り得ないためか。

されど、神は我等の欲求の畫く畫像に過ぎないと云ふホイエルバッハの說が正しくなく、我等の衷心の欲求を滿し給ふべき神が眞に實在し給ふならば、何とかして我等にその御意（こころ）を啓示し給はない筈はない。否、我等が求める以上に、神の方から我等を求めつゝあり給ふべきではあるまいか。我等はかゝる神をこそ望め、只天の高きに座して下界の騒亂悲痛を冷靜に見下し、之がため少しも心を動かさないやうな神を求めては居ない。

汝、吾に祈らば吾汝に聽かん。
われを尋ねば、吾に遇はん。
一心をもて吾を求めなば、
吾に汝は尋ね遇ふべし（エレミヤ二九・一三）。

かゝる神を求めて居るのである。否、

吾は吾を求めざりし者に探されんとして
かしこに在りき。
吾を尋ねざりし者に見出されんとして
かしこに在りき。

我が名を呼ばざりし國民に吾は云ひたり。
吾はこゝに在り、こゝに在りと（イザヤ六五）
人の方から求めない先に、神は己を現はし給ひつゝあるのである。

パウロは云ふた。「神の見るべからざる永遠の能力と神性とは造られたる物により、世の創より悟り得て明かに見る」（ロマ一・二〇）と。天然の美に、その中に在る無限の力に、智慧に、惠澤に、我等は之を創造し給ふた神の存在を悟り得る。

天然の美は野に在り、山に在り、海に在る。春の野に出でゝ見よ。今まで冬の猛威に壓せられて死んだと見えた生命が土から萠え出て、うらゝかなる陽光に照らされて、赤に黄に紫に、色取り取りに咲き盛かれるその色彩、野山を毛氈の如くに飾る此の美は何處から來たか。そも、何のために此の美は在る。草は無心、土は死せるが如し、此の滿ち溢れる美はその源を神に歸せずして、何にか歸し得やう。

神の美と共に神の智慧は此の花に在り、鳥にあり、造られたるもの一つとして之を現はさないものはない。試みに我等の眼球を精査せよ、其の精巧は眞に驚嘆するばかりである。

寸前の文字も數里先も悉く同時に直徑五分の眼球の中に明瞭に映寫され、その遠近と大小と色彩とを違へない。此の眼球は思ふがまゝの方向に轉じ、又光線の强弱により、明暗を調節する。又此の眼球を常に清淨にするためには絶えず涙腺から水が流れ出て之を洗ひ、その水は鼻孔に入つて乾燥される。又眼球を危險より防止するために瞼は常に本能的に閉ぢ又開く。人の造つた如何なる精巧な望遠鏡も到底此の眼球の精巧に及ばない。

只一個の眼球に於て然り、我等の耳、我等の口、我等の肉體、凡て此の地に生存する動物、植物、

それ等悉く、よくもかく精巧に造られたるかを思ふ。望遠鏡は之を造るものなくしては存在しない。望遠鏡以上に精巧なる眼球が偶然に生ずるわけがない。これはそも誰が造つたか、親か、否。祖先か、否。人は云ふ自然陶汰による進化の結果であると。然し乍ら、自然陶汰とは惡しきものが陶汰され、善きものが殘存した事を云ふのであつて、如何にして此の善きものが生じたかは説明しない。

ダーウヰンは「種子の起源」にて云つた。それは「偶然に生じたのである。然し乍ら、かく云ふは不正確である。それは個々の變化の原因について我等の無智を明かに承認するために都合がよいからである」と。自然の法則が此の巧妙な眼を造つたのではない。何となれば自然の法則は只その創造された順序を説明するものであつて、それ自身何をも造り出す力は無いからである。

我等の眼に遙に劣る望遠鏡すら、我等なくしては造られないならば、それ以上の眼球は我等以上の智慧と能力ある神の創造であると察する外はない。我等の耳、我等の肉體、我等の心、其の他精巧を極めたる此の天然悉くは、神が之を創造し給ふたものと見なければならない。我等は天然を通じ之を創造し給へる神を思ふ。まことに聖詩人が歌つたやうに

もろもろの天は神の榮光をあらわし
おほそらはその御手のわざを示す
この日ことばをかの日につたへ
この夜智識をかの夜におくる
語らずいはず、その聲きこえざるに
そのひゞきは全地にあまねく
そのことばは地のはてにまでおよぶ（詩一九）

歴史の神

我等は又人類の歴史の中に神の御手の導きを發

見する。歴史は神の正義を大まかに書せる記錄であると云ふ。

天然の中に我等が探つて見出す神は、我等に美と力と智慧とを示し給ふも、未だ神の性質、その聖意、その目的は明瞭に示されない。これ天然は人間以下であつて人格を有しないからである。人間以下の物の中に人間以上のものを現はす事は困難である。されば人間各自の生涯及び人間全體の歴史の中には稍明瞭に之を現はし得る。

生涯全く神と共に歩んだ信仰の人と、全く自己の利益を追求して生きたものとを比較して見よ。その一つ一つの言動については、その中に神の有無を發見することは困難であろうが、靜かに兩者の一生を大觀せば、そこに明かに神に導かれた者と、然らざる者との區別がはつきりわかる。

丁度そのやうに長い人類の歴史の中に神を認め得るのである。抑も人類の歴史を以て全部神の聖意の實現、その創造であると云ふ事は出來ない。何となれば人は自由を有し、その愚、その罪が神の聖意の實現を妨げる事が多いからである。此の事を認めずして、ヘーゲルのやうに、人類の歴史を以て悉く之を絶對的觀念の必然的自己實現と見るのは正しくない（その歴史哲學）。さりとて之と正反對に、コントのやうに、人類の歴史の一切の主動力を人間の智能に歸することは明かに誤つてゐる（その實證論）。

マシュー・アーノルドは云つた。「人生の四分の三は行爲である」と。こゝに行爲と云ふのは倫理的行爲の事である。即ち正義である。そして彼に由れば殘りの四分の一は「正義を達成せしめる我等にあらぬ力」の働くところであると云ふ。彼は此の立場から歴史を見て云つた。

あゝ、來ること遲き力ある腕よ、遂に永遠（神のこと）は汝を顯はさずと思ひ、宛かも正義はなき

ものゝ如く振舞ひつゝあるかの罪人らを打つことなきや。否、そうする必要はない。彼等は打たれて居る。逐次、彼は滅びて居る。アッシリヤ滅び、バビロン、ギリシヤ、ローマ、彼等は皆行爲、即ち正義なきに由りて滅ぶのである。

「もろもろの民は騷ぎ立ち、もろもろの國は動きたり。神その聲を出し給へば、地はやがてとけぬ」（文學と教義二〇四頁）

嘗てポーランドを分割したドイツ、オーストリア、ロシアの三大帝國は、此度の大戰により滅んだ。今東洋に於てもろもろの民は騷ぎ、もろ〳〵の國は動きつゝある。そこに嚴然たる神の御手の働きがある。人の惡が盛となる時國は滅ぶ。之れ神の正義である。然も神は人類の惡を取り除き、人をして善に向はしめ、人類を進歩せしめ給ひつゝある。我等は人類の歷史を一貫してそこに「彌榮なる御旨の横はる」を知る。之に由つて神の存在とその聖意とを窺ひ得る。まことに人類の歷史は各個人の生涯と同じく、大まかに神の正義を記錄したものである。

良心の神

然し乍ら、歷史の中に神の存在を認め得さすのは我等の良心である。如何なる大歷史家と雖も、良心が鋭敏ならずしては、如何に精しく個々の史料に通曉しても、その中に神を發見する事は出來ない。神は我等の良心によらずしては知ることが出來ない。良心に聞ゆる聲、その是非善惡の判斷は、我等自身が勝手に創造するものではない。自分の願は右に進み度き時にも、良心は左に行けと命ずることがある。自分は自己の行爲を辯護しやうとする時、良心は之を否とすることがある。人の良心は己以上に義しき者の聲である。即ち神の御聲である。

律法（ユダヤ人の有する神の特別啓示の書）を有たぬ異邦人、もし本性のまゝ律法に載せたる所をおこなふ時は、律法を有たずとも、自ら己が律法たるなり。――即ち律法の命ずる所のその心に錄されたるを顯はし、おのが良心もこれが證をなして、その念たがひに或は訴へ、或は辯明す。（ロマ二・一四―一五）

此の良心ありて、我等は自己の好惡以外に、我等に自發的服從を命ずる絶對に義しい道德律が全宇宙に存在し、人類の歷史を又個人の生涯を支配して居る事を感ずる。若しその聲に反して己が意を果せば、早晩我等の生活に破綻が來ることを知る。之によつて我等は神の存在とその聖意とを察知し得る。

特別啓示の必要

かやうに神は天然に、人類の歷史に、又各人の良心に己を顯はし給ふ。然し乍ら前に述べたやうに、人格以下の天然に自己を顯はし給ふ神の御意は我等に明瞭でない。それ故、我等は動々もすれば天然そのものを神として拜し易くある。或は太陽を、星を、山を河を、又自然の豐穰なる生產力を、神として拜し易くある。又人類の歷史についても、鋭敏なる良心を以てせずば、その中に在る神の御意を發見する事は出來ない。人類の活動の趨勢を驗し、その方向を推察し、之よりして抽出し得た歷史に一貫する原理、即ち歷史哲學を其の儘神の御意なりとする事は出來ない。歷史の大勢と云ひ、その原理と云ふものは人格なく、意志なき一つの力として感ぜられるのみである。マルクスの唯物史觀はその好適例である。

又史上の個々の奇しき出來事を取つて、之を以て悉く神の御業なりと測斷する事は誤り易い。何となれば前に述べたやうに、その中には人間の暗

愚、兇惡が交つて働いて種々の事件を起すからである。若し眞に歷史を解せんとせば、そして其の中に眞の神の御働きを見んとせば、それは神から直接啓示せられた者の良心と、これを通して直感されたその意味に由らねばならない。即ち、預言者の史觀が必要である。

然るに各人の良心は預言者のやうに鋭敏ではない。近代の學者は、良心は社會の慣習が產出したものに過ぎず、之が我等に絕對に服從を命ずる命令の形で感ぜられるのは、社會が之を强要し、若し之に違反する時は何等かの制裁を伴ひ來るからである。それ故良心の內容は其の當時の社會の道德標準以上に出でないと說く。

勿論之れは誤つて居る。良心は我等の願望に獨立すると同樣に、明かに社會の慣習に獨立して、自主的に社會の道德狀態について、その善惡是非の判斷するものである。それ故この良心の發達は社會道德の發達に因ると云ふよりも、却つて社會道德の發達が各人の良心の發達に因る方が大であると云はねばならない。個人の良心が益々敏感となつて、一般社會の道德水準をそこまで引上げるのである。

我等に神を求める熱烈なる願望あり乍ら、我等の良心は鈍く、神を明かに知る事が出來ない。何故神は我等の切なるこの願望に答へて、此等の障害を排除し、己れ自らを我等に明瞭に顯はし給はないのであるか。それは神が無情な爲でも、無能であるからでもない。人をして各自の自由を働かしめ、良心を鋭敏ならしめ、その責任を感ぜしめ、以てその人格を向上せしめ、それに由つて我等以上の完全なる人格者なる神に近づくやうになるまで、神は「かくれんぼ」をして己れを探し出す者を待つてゐ給ふからである。我等の人格の向上のみが神を知り得る。神は豚に眞珠を投げ與へ給は

ない、「求めよさらば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。すべて求むる者は得、たづぬる者は見出し、門をたゝく者は開かるゝなり」（マタイ傳七・七―九）と宣ふ。

それ故、神が人に己を顯はし給ふ方法は漸進的である。如何なる大學者も最初はイロハより學ばしめられるやうに。神は決して最初から己が全部を示し給はない。「誡命（いましめ）にいましめを加へ、誡命にいましめを加へ、度（のり）にのりをくはへ、度にのりを加へ、此（ここ）にもすこしく、彼（かしこ）にも少しく敎え」（イザヤ二八・一三）神は「多くに分ち、多くの方法をもて先祖たちに語り給ふ」（ヘブル書一・一）た。人の能力が發達し、人格が向上するに從ひ、神は次第にその全貌を顯はし給ふのである。

故に人間の宗敎發達史は一面、神の自己啓示である。現今世界に各種雜多の宗敎があり、各民族各人に由り、その神觀が異なり、或は多神、或は汎神、或は理神、或は超越內在の眞の神を拜する雜多の有樣を見て、此等の宗敎が唯一つの眞の神から出たものであるか否かを疑ふ。それは怪しむに足らない。神は人間の發達狀態に應じてその必要だけの眞理を示し給ふからである。

さり乍ら此等種々雜多の宗敎は、或は人間の不完全に由り、又社會の事情などに制約せられて、完全に眞の神を顯はさない。神若し人類を愛し、その切なる願を聽き給ふならば、これで滿足し給ふ筈はない。今一層有効に我等を敎へ導き、誤りなく神御自身を我等に示し給ふべきではあるまいか。然り、この爲めに、神は特に、イスラエルの民を選び、之を用ひて、全世界の民に正しく己を知らしめんとし、最も典型約なる漸進的方法を以て己を正しく顯はし給ふたのである。イスラエルの民の選別の理由はこゝに在つた。

エレミヤ記の研究（二）

巻物の燒棄（上）

江原萬里

國際時局の大變動

紀元前六百八年、咲き初めたユダの榮華の蕾はメギドンに於ける一陣の陰風にはかなくも凋み、ヨシア王の死以來ユダは急轉直下、滅亡に向つた。此の年は啻にユダの國運の轉回期のみではなかつた。實に爾後の世界歴史の方向を決定した程の世界的大變動の生じた時期であつた。

當時全世界の覇權を掌握して居たアッシリア大帝國はその最後の大王アシユール・バニ・バールの死後國勢衰へ、紀元前六百二十五年、其の部下なるバビロンの大守ナポポラッサルは事實上獨立し、王たるの權力を掌握するに至つた。ナポポラッサルは自己の勢力の擴張を企て、同じくアッシリアの配下に屬したメヂヤと提携して、共にアッシリア帝國の分割を劃策した。之がためメヂアは再度アッシリアの首府ニネベを圍んだが、兩度共前に述べたスキタイ人のために、後方を襲はれ、撤退を餘儀なくせしめられた。

然るに紀元前六百六年、即ちユダの王ヨシア王がメギドンに戰死した二年後、メヂアは完全にニネベを陷れ、さしもに強大にして、四隣の諸民族を威服せしめたアッシリア帝國は土崩瓦解するに至つた。その領土は兩分され、ユウフラテス河以南の地はバビロン王の手中に歸した。

此の形勢を見て取つて、今までアッシリアに隷屬してゐたエジプト王ネコは、己も亦その良き割前に與らんとして、大軍を率ひて北上し、圖らずもヨシア王に遮へぎられて、メギドンに王を殺し、遂にユウフラテス河の上流に出でた。バビロン王

との衝突は避くべくもあらず、翌年即ち紀元前六百五年、兩軍カルケミシに於て大激戰を交はすに至つたのである。

之れ實に天下分目の關ケ原の戰であつた。若しエジプト王が此の戰に勝利を得んか、爾後世界帝國の覇權はエジプトに移り、世界歷史は全く一變して居つたであらう。然るにエジプト王ネコはバビロン王の子ネブカドレザルの爲めに大敗し、シリア、及びパレスチナの全土擧げてバビロンの配下に歸し、中原の鹿は確實にバビロンの物となつたのである。エジプトの覇業遂に成らず、「エジプト王は、重ねてその國より出で來らざりき」（列王記下二四・七）

然し乍ら當時世界歷史がかく大渦卷をなして回轉しつゝあつた此の渦中に在つて、その行先を豫見し、國運を誤らず指導する事は大政治家にあらずしては到底爲し得ない。エジプトは新興バビロンのために大敗したとは云へ、數千年の古き歷史を有し、文物制度備はり、國大にして民豐に、南方の雄國であつた。やがて勢力を盛返し來る事は想像に難くない。然るに北方の狀勢はアッシリア帝國崩壞後少しも安定せず、今バビロンがその後を承けて覇業を大成したやうに見ゆるも、メヂアはその北方に在り、シリア、パレスチナの諸民族必ずしも新興バビロンに悅服する者にあらず、バビロンの基礎は未だ甚だ薄弱であつて、何日何時他の勢力により覆されるや皆目不明である。

爰に於てか、ヨシア王の死後ユダ國內に二黨派が生じた。その一つは、エジプトに由つてバビロンの南下を制止しやうとする親エジプト黨であつた。他の一つは新興のバビロンに抵抗する事の暴擧である事を悟り、寧ろ之に屈して國の滅亡を避けやうとする親バビロン黨がそれであつた。當時のユダ國は、イザヤ時代とその國內及國外の情勢

を異にし、此の二大國のいづれかに服從する外、國家存在の道はなかつたのである。

世界の形勢は刻々に推移し、諸民族の興亡は猫の目のやうに變轉しつゝあり、他方ユダ國内の民心は希望より失望に、失望より自暴自棄にと轉落しつある此の際、嵐は猛り、怒濤は舷を打ち、空には星影だになき暗夜に一國の民とその運命とを托せる船を操縱して、岩礁に乘り上げず、覆滅を免れ、之を安全の港に導くことは容易の業ではない。それは善意なりしヨシア王以上の政治的天才を要した。ユダ國は今や政治家としてのエレミヤを要する時となつたのである。

此の時エレミヤは年既に四十歳を越え、幾度か辛慘を經て、その智見と勇氣とは益々增し加はつた。彼は身を挺して敢然として此の難局に當つたのである。彼をおいて今何人か「神の民」とその宗教とを悲慘なる破滅より救ふものがあらうか。

エレミヤは此の時までは只一傳導師として、詩を以て神の聖意を語つた。今や彼は一國の運命を雙肩に荷うて、その方向を定める大政治家として立たしめられたのである。彼が神殿に獅子吼して以來、當時一躍著名の人物となり、國家の政務に對する有力なる發言者となつた。爾來その勢力はイザヤが嘗て國王と國民との上に有つた勢力に比べて決して劣らない程であつた。

エレミヤはカルケミシの戰の結果早くも今後の世界の歷史はバビロンを中心として旋回することを觀取した。彼が大政治家として此の先見を有したのは、單に世事に通曉したためではなく、大信仰があつたからである。即ち彼は此の世界的變局に際し、彼が最初神から命ぜられて預言せしめられた、北禍來の神の言が如何に現實の世界に顯はれ來たかを悟つたからである。

實に彼が若き日に預言者として立たしめられた

のは、神が彼をして「北よりの災と大なる敗壞のぞむ。われ美しき窈窕なるシオンの女を滅さん」(六・一—二)事を宣べしめるためであつた。然るに彼が青年時代に國民に警告したスキタイ人の來冠が只一片の杞憂に終り、北の空の暗雲は暫く晴れ亘り、内にはヨシア王の改革あり、人々は平和を謳歌した。此の二十餘年の年月、彼は只獨り僞の預言者として嘲けられた。人々は彼に向つて「ヱホバの御言は何處にありや、いま之を臨ましめよ」と愚弄した。而して彼自らも心の中に神に棄てられたかの如く感じて堪え難き苦痛を感じた。

然し乍ら、其時ですら彼はその確信を翻へすことは出來なかつた。抑も彼は自ら進んで預言者となつたのではない。神がいやがる彼を無理強ひに預言者とし給ふたのである。されば假令遲れる事はあつても、神の言は必ずなるであらう。之れ暗黑の中に在つて彼の信じて疑はざる所であつた。

遂に來るべき恐ろしき時は來た。神が彼に北禍を預言せしめ給ふたのは、スキタイ人の來襲でなくして、新興バビロン國の來寇である事が明白となつた。イスラエルの聖者は少しもまどろみ給はず、目覺めの樹にその目覺めて居給ふ事を敎え給ふた神は、今やその御言を實現せんとし給ふ。若き日に告げ給ふた神の御言が今や世界歴史上の具體的事實として眼前に顯はれて來たのである。ユダの國中國の行先如何にと思ひ惑ふ時、ヱレミヤは早くも國はバビロン王ネブカドレザル王に由つて滅ぼされる事を確信したのである。我等の生涯に於ても青年時代に示された神の御言は、假令一時支障あるも何等かの形式に於て必らずその生涯の中に實現する。

卷物の編纂

爰に於て、ヱレミヤは二十二年又は三年の間彼

が受けた神の御言に具體的意味を發見して、之を國民に示し、今更に神の御言の謬らざる事を示す必要を感じた。

ユダ王ヨシアの子エホヤキムの四年に、この言エホバよりエレミヤに臨みていふ。汝卷物をとり、吾汝に語りし日、即ちヨシアの日より今日に至るまで、イスラエルと、ユダと、萬國とにつき、わが汝に語りし凡ての言を之に錄せ、(三六・一及三)。

彼はこの爲めネリヤの子バルクを祕書として今までの彼の預言を編纂せしめ、之を一卷の卷物として收錄した。時はエホヤキム王の四年十二月、(今の曆にて三月に當る)、カルケミシの大戰の直後であつた。こゝに注意すべきこは此の記事はエレミヤ記が如何にして出來たかの批判上甚だ重要なる記事である事である。

エレミヤ記を通讀した者が直ちに感ずる一事は、その最初の部分は纏まつてゐるが、次第に文體相錯雜し、時代相前後し、纏まつてゐない事である。之は數章毎に一組となつてゐる諸篇が初めの部分に附加されたからである。

エレミヤ記は大體之をエレミヤ自身の作なる預言及び時論集と彼の祕書バルクが主として書いたエレミヤ傳との二部より成る。此の外に、國滅び、バビロン流配中、又はそれから歸還後の他人の文章が之に附加され、遂に本文中に混入したものがある。此の後世の附加挿入文は、或は獨立の章を成せる長文の預言又は叙述あり、或は短文にしてエレミヤの預言中に挿入され、一讀之を分別し難きものもある。

エレミヤ記中何れの部分が後世の附加であるかについては、現今學者間大體の意見に一致がある、個々の場合には必ずしもそうでない。之れエレミヤの性格及びその言行を確定する上に各人が見解を異にする所以である。その一つを或は純正

とし、或は後世の附加とする事により、之がその他の部分を或は純正とし、或は附加とする標準となり、遂にヱレミヤの人物及びその行動までが別種のものとなつて來るのである。

此等問題の章句中最も重要なるものは、第一章のヱレミヤの聖召の記事、第十一章の申命記に基く宗教改革に對するヱレミヤの態度、第三十一章の新約の大預言之である。即ち之を僞作、後世の附加と見るや否やである。私は現今多數の學者に從つて之等を皆眞正のものと認める。

今後世の附加を除き、ヱレミヤ記をヱレミヤ自作の預言及びバルクの著ヱレミヤ傳の二部に分つ時、此のヱレミヤの預言中ヱレミヤの最初期のものからカルケミシの戰にエジプト敗れ、バビロンの覇業が確定した時まで、二十二年又は三年の間のものが、今卷物として收錄されたのである。

其の始め彼が漠然と「北よりの敵」の來襲を預言した。それが今バビロンである事が明白となつた。さればその預言を今一卷の卷物に收錄せんとする時、之を補修し、最初抽象的にぼんやりと述べた箇所を具體的に明瞭にしたと思はれるものもある。現在のヱレミヤ記中、初期の預言に後の時代のものが混入したと思はれるのはそのためである。

此の卷物の內容は、現在の第二章より第二十五章迄の中、ヱホヤキム王の四年、即ちカルケミシの戰以後のものを除外した殘りの大部分がそれであると見て大過なからう。私が今まで述べて來た彼の預言の詩が大要である。而してヱレミヤ記第二十五章は此の卷物の結論である。この結論にも亦、後の挿入文があるを以てこれを除去し、只純粹のものと思はるゝものをこゝに摘記する。

三　ユダの王アモンの子ヨシアの十三年より、今日に至るまで、二十有三年の間、ヱホバの言吾に臨めり。吾これを汝らに告げ、頻りにこれを語れり。五　曰

く、汝らおの〳〵其の惡しき途と、その惡しき行を棄てよ。然らばエホバが汝等と汝らの先祖に與へ給ひし地に、永遠より永遠にいたるまで住むことを得ん。七然れど汝らは吾にきかず。

八この故に、萬軍のエホバかく云ひ給ふ。汝ら我言を聽かざりしにより、九吾北の族を招きよせて此の地と其の民と其の四圍の諸國とを滅ぼさしめ、之を荒らし、永遠の荒地として、人々の叱罵とし又物笑たらしめん。一〇またわれ欣喜、歡樂の聲、新郎新婦の聲、ひきうすの音及び燈の光を彼らの中より絶えしめん。一一又諸國に七十年の間仕ふべし。一二此地につきて語りし我が言、然り、此の書に記されたる凡ての言を、此の地に臨ましめん。（第二十五章）

之れが彼の二十三年間人に嘲けられ乍ら、神の預言者として國民に告げ來つた神の御言の結論であつた。ユダが神に背き、神殿に神を祀りつゝ、眞の神を捨てた結果は、國の滅亡である。神は「北よりの族」を以て之を罰し給ふのである。彼がこゝにバビロン王と云はずして「北の族」と云つたのは以前北禍を預言したことが今事實となつた事をこれで感ぜしめやうとした意圖であらう。

今やバビロン王ネブカトネザルが世界の覇權を掌握するに至つたのは、これ神が彼を起してユダの罪を罰し給ふためである。ユダの國の滅びるのは、ユダの神エホバが無力であるためではなく、却つてエホバは全世界の國民を支配し、或は之を興し、或は之を滅ぼし給ふ能力ある神であるからである。神は今バビロン王をしてユダを滅ぼさせ、その民を捕へてバビロンに流囚とし、七十年間これに仕へしめ給ふ。之れエレミヤが此の時まで神から示された聖意の總計であつた。

エレミヤは此の事を今一度民に感銘せしめんとて其の時期を待つた。

卷物の公開

機は遂に到來した。エホヤキム王の五年九月

（即ち卷物編纂に從事してから九月後、現今の暦によれば十二月）ユダ全土に斷食擧行の詔勅あり、當日國中からエルサレムの神殿に參集した。エレミヤは嘗て神殿で大演說を爲したやうに、此の日全國民の前に、此の卷物の預言を讀み、彼等に警告を與へやうと期したのである。彼はその友人にして、神殿演說の後彼を庇護したアヒカムの兄弟に當る書記（法官）ゲマリヤと打合せ、其の準備をなした。

然るに當日に至り、眞冬の事なれば或は感冒にかゝつたためか、それとも他に何か儀式上の不淨のためか、エレミヤは思はぬ差支が生じ、（三六・五、邦譯に禁錮られたればとあるは誤。原意は妨げられたれば）、已を得ずバルクに命じて、卷物を携へて新門の入口の側に在るゲマリヤの室に到らしめ、そこに集まり來た國民の重立ちたる人々の前で彼に代つて之を讀ましめた。此の新門は嘗てエレミヤが神殿廢墟の大演說をなしたところである。

聽衆はバルクの讀み上げた預言を聽いて今更に驚き、今まで之を輕蔑して來た事について反省させられたに相違あるまい。彼等は薄氣味惡き預言を聞いて國の前途を危惧し、何人もバルクを捕へやうとする者はなかつた。祭司も預言者たちも、此の度は明白なる國難を前にして、之に反對し得ず、敢て手を下し兼ねた。

此の預言の言を聞いた書記ゲマリヤの子ミカヤは、これは國家の一大事と思ひ、急ぎ王宮に入り、國務大臣の閣議の席に至り、此の事を報告した。此の席には嘗てウリヤがエレミヤと同じく神殿廢墟の演說を爲してエジプトに亡命した時、之を捕ふるために王命に由つてエジプトに遣はされたエルナタンあり、今バルクに己が室を借して卷物を讀ましめたエレミヤの親友、而して今報告に來たミカヤの父、申命記に由る大改革の首動者シヤバンの子なるゲマリヤ等が居た。（之に由り察するにゲマ

リヤは豫じめその子ミカヤに報告するやう命じておいたのかも知れない)。

彼らはミカヤの報告を聞きバルクを招致して、そこで再びその卷物を讀ましめた。之を聞いて彼らは「俱に懼れ」かゝる大事件を不問にする譯にゆかず「是非」王に報告しなければならないと決議した。(之に由り察するに王に此の卷物を讀ますことがゲマリヤの最初の計畫らしく見ゆる)。而して王が此の卷物を見てエレミヤとバルクを殺さうとする危險を慮り、兩人をして急ぎ隱れしめた。

時は眞冬の十二月、ヱホヤキム王は冬宮にあり、爐の前に座して、國の將來を沈思し、何かしら恐ろしき豫感に戰慄しつゝあつた。王はエジプトの力によつて王となり、現に親エジプト黨に由つて王位を支持せられて居る者である。されば王は何とかしてバビロンに抵抗し、襲ひ來る北方の妖雲を拂ひ除かねばならないと日夜肝膽を碎ゐたのである。此の國がバビロンのために滅亡すると云ふ事、その事のために既に二十三年以前から、神は眞の預言者をユダに遣して之を預言せしめ給ひつゝあつたと云ふ事、此の報告程王の心を焦慮せしめ、暗然たらしめ、怒らしたものはない。

然し乍ら王の心は冷酷にして傲慢、且つ頑迷であつた。王は大臣の報を聞き、その卷物を取り寄せ、侍從をしてその面前で之を讀ましめた。その言は勿論王に喜ばしき音信ではない。心は嚴冬の如く冷たく、身は國の將來を思ふて戰慄しつゝあつた王の心は、之を聽いて爐の火よりも赤く憤怒と憎惡とに燃えた。侍從が卷物を讀みゆく端から、王はその卷物を取り寄せ、自ら小刀を以て之を裁斷して、爐の火に投じた。かくする事再三、卷物は遂に悉く爐の灰と化した。

然し乍ら卷物が灰になつたとて、神の御言が煙となつたのではない。兒戲に類する王の仕業、神

の御言を畏れないその不信仰に、そこに列したシャバンの子ゲマリヤであつたか又はその他の國務大臣であつたかはわからないが、之を諫止する者があつたが、王は敢て此の事をなし、又そこに居た王族及び宮中の大官等も亦それに對して全く無關心であつた。

嘗てシャバンが神殿内で發見された申命記をヨシア王の面前讀ん時は、王は恐懼して衣を裂いて起ち上つた。然るにエホヤキム「王とその臣僕等とは此の諸の言をきけども懼れず、亦衣を裂かざりき（三六・二四）。却つて王はエレミヤとバルクとを執へ嚴刑に處すべき事を命じた。されど此の時二人は國務大臣の勸告によつて逸早くその姿を匿した後であつた。此の事件によつて我等は當時、王及び宮中對府中の間に意見の相意があり、宮中は親エジプト黨多く、府中には親バビロン黨が多かつた事を知る。（以下次號）

社會と家族

社會の單位は家族である。即ち社會を構成する者は各個人でなくして各家族である。それ故に家族は社會の縮圖である。其の雛形である。兩者の間に共通の原理が横はる。一家三十年の興廢史は國家社會百年の盛衰史である。我等は我等の親しき者の家族の推移を見て國の成行を察知し得る。一時富み榮え、傲り、只物質的幸福をのみ求めた家が次第に衰へ行き、遂に離散し、破滅するのを見る。又貧乏の中に在つても之を苦とせず、精神的向上を求め、人の富めるを羨まず、勤勉正直、親に孝兄弟に愛ある家が次第に興るのを見る。

されば國家の重大問題は之を若し自分の一家内に起りしならば如何と考へ、自分の家の難問題は之を國家大に擴大して考へて見る時、その公正なる解決の緒を見出すであらう。

受難週間の研究（五）

汝らは好まざりき

小栗襄三

繩の鞭にて神殿を潔め給ひしイエスは翌日再びエルサレムに顯はれ、多くの比譬と教訓を垂れ又談論せられた。前日は宮潔めであり、今日は主權者等を潔め給ふたのである。それは最高法院サンヒドリムに對するものである。彼等はイエスを試みんと種々なる罠を設へ、民衆の面前にて彼を論詰し己れ等をヨリ神に忠なる者と人々に思はしめん爲めであり、又自己の聖書智識を誇らん爲めのみの行爲に外ならなかつた。

當時の最高法院サンヒドリムは上院と下院とに分れ、上院は七十一名、下院は二十三名の議員より構成し、羅馬帝國の支配下に屬すとは云へ、行政權を持ち、猶太法に依る裁判を執行し、處罰し得た。併し死刑を行ふ場合には羅馬官憲の認可を必要とせしも、除外例として異邦人—羅馬市民でさへ—が神殿の柵を越へて内庭に入る場合には彼等の自主權にて死刑を執行し得た。（新約に於けるサンヒドリムの關係せし死刑はイエスの場合のみなり）この最高法院中特に勢力を張つてゐた議員等はパリサイ派の人々であつた。彼等は政治的方面よりも主として理論的方面を管掌してゐたのである。この猶太民族の最高機關に關與する、典型的人々なるパリサイ人も、タルムードに依れば、七種の型があつた。その一は「飾肩パリサイ」と稱して、己が善行を肩にのみ荷ひ、律法に服從するも、その精神を閑却し、政略的にこれを行ひ、律法の利用價値にのみ拘泥するの徒がゐた。その二は「鶴首パリサイ」と稱し、功名を獲得せん爲めに、何事も直ちに實行し得ず、漸時左右を顧慮し

て、然る後ち徐に手を下すの徒であり、その三は「出血パリサイ」と稱し、婦女子の姿が彼の眼底を射るを避けんとするに熱心なる餘り、壁、石等に躓きて血を流し、自らを損ずる者、その裏面に於ては金錢を貪るに駿足なる徒であり。その四は「ペキンパリサイ」と稱し、己が善行を表面に塗り固め、自らを聖人なりとして自己廣告に、宣傳に、寧日なく、一度人に指さゝれんか百の辨解に多忙なる徒であり。その五は「勘定パリサイ」と稱し己が善行と又實行せざりし義務を補ふ爲めに何を爲す可き乎と、日々數へるに忙しく、事實何をも爲さずに日を過す徒であり。その六は「恐怖パリサイ」と稱し、神を唯恐る可き者なりとなし何事にも戰々兢々として善を爲すに遲足なる者であり。その七は「飾愛パリサイ」と稱し、口に愛を唱へて、自ら愛する事疎く、人には愛を要求して絶まず。一度貧者に物を與へんか、憐人の迷惑する程宣傳をなすの徒であつた。

爰にイエスは、群衆と弟子たちとに語りて言ひ給ふた。『學者とパリサイ人とはモーセの座を占むされば凡ての言ふ所は、守りて行へ、されど、その所作には効ふな、彼らは言ふのみにて行はぬなり。また重き荷を括りて人の肩にのせ、己は指にて之を動かさんともせず。凡てその所作は人に見られん爲にするなり』と、然して彼は學者とパリサイ人に對しては七度も「禍害なるかな學者とパリサイ人よ」と繰返され、彼等の僞善に對しては徹底的に怒を發せられた。

誠に彼等は白く塗りたる墓の如く、外は美しく見え、人々をして神人か、キリストかと思はしめ又人に斯く呼ばるゝを好みて宣傳するも、内は死人の骨とさまざまの穢とにて滿つる、僞善と不法の凝結鬼であつた。もし彼等が信者を獲んか、之を己に倍したるゲヘナの子となし、己れの行爲、

信仰を摸放せしめて得々とし、神の恩寵を忘れ、謙遜になる可きに關らず反つて傲慢不遜の徒輩を作り、遂にはイエスをも罠に掛けんとし、神に忠實なるが如くに裝ふてイエスを十字架に付くる者である。彼等は云ふ、「我らもし先祖の時にありしならぼ、預言者の血を流すことに與せざりし」と。

我等斯如き徒に習つてはならない。彼等の敎へには從ふべし。彼等の行爲には從ふ可からずである。世に恐る可きは律法と主義である。律法に捕はれ主義に捕はる時にイエスの福音は消滅する。喜びの福音が律法化し、主義化する時に、其處に何の結實を見るであらうか。多くの辨解と、多くの論理と、又己が主義主張を正しくせん爲めに、己が主義主張に從はざる者を悉く罵詈讒謗し、喜びと、平和と、謙遜が無くなる。

乍併ら、イエスの福音は喜びの福音であつた。この福音は何んの辨解も、論理も、主義も、主張も不必要である。その恩惠の餘りに豐かなるに我等をして唯喜びと感謝に溢れしめる。この福音には貧富老若男女の區別なく、無敎會主義、敎會主義たるを問はない。信ずれば救はるゝ福音である。然しもし主義、敎派に依らざれば救はれずと爲すならば禍害なる哉である。之はイエスの福音を再び律法化する事である。もし我等の信仰が主義化し、敎派化するならば、其處には必ずパリサイ的色彩を帶びる。律法と福音とは根底に於て相反するものである。前者は人の義であり、後者は神の義である。キリストを信ずる信仰に由つて救はる福音を再び律法化するは誰である乎。イエスは云ひ給ふ。『あゝエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて擊つ者よ、牝鷄のその雛を翼の下に集むるごとく、我はなんぢの子どもを集めんと爲しこと幾度ぞや、然れど汝らは好まざりき』。

信仰を摸放せしめて得々とし、神の恩寵を忘れ、謙遜になる可きに關らず反つて傲慢不遜の徒輩を作り、遂にはイエスをも罠に掛けんとし、神に忠實なるが如くに裝ふてイエスを十字架に付くる者である。彼等は云ふ、「我らもし先祖の時にありしならば、預言者の血を流すことに與せざりし」と。

我等斯如き徒に習つてはならない。彼等の數へには從ふべし。彼等の行爲には從ふ可からずである。世に恐る可きは律法と主義である。律法に捕はれ主義に捕はる時にイエスの福音は消滅する。喜びの福音が律法化し、主義化する時に、其處に何の結實を見るであらうか。多くの辨解と、多くの論理と、又己が主義主張を正しくせん爲めに、己が主義主張に從はざる者を悉く罵詈讒謗し、喜びと、平和と、謙遜が無くなる。

乍併ら、イエスの福音は喜びの福音であつた。この福音は何んの辨解も、論理も、主義も、主張も不必要である。その恩惠の餘りに豐かなるに我等をして唯喜びと感謝に溢れしめる。この福音には貧富老若男女の區別なく、無教會主義、教會主義たるを問はない。信ずれば救はるゝ福音である。然しもし主義、教派に依らざれば救はれずと爲すならば禍害なる哉である。之はイエスの福音を再び律法化する事である。もし我等の信仰が主義化し、教派化するならば、其處には必ずパリサイ的色彩を帶びる。律法と福音とは根底に於て相反するものである。前者は人の義であり、後者は神の義である。キリストを信ずる信仰に由つて救はる福音を再び律法化するは誰である乎。イエスは云ひ給ふ。『あゝエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて擊つ者よ、牝鷄のその雛を翼の下に集むるごとく、我はなんぢの子どもを集めんと爲しこと幾度ぞや、然れど汝らは好まざりき』。

柏木通信（第十九信）

齋藤宗次郎

柏木の近狀　嘗て先生が今に此樹は柏木の一名木になるよと仰せられし門側のヒマラヤ杉は、既に徑七寸を越えて全邸を護るの觀がある。其蔭に靜養し來りし恩師夫人には益々健康の度が進んで、時には葡萄棚に面する應接間に訪問客を迎へて、快く談笑する程になられた。此夏は湘南片瀬の松林中に病後を養はるゝことになつた。余は鈴木氏と共に其留守宅の階上に積まるゝ貴重なる全集の資料を、全責任を負ふて保管に當ることゝなつた。

日曜日の集會　神アブラハムを試みんとて之をアブラハムよと呼び給ふた。神は愛する者の靈を徒らには呼び給はない。必ずや深き御心より發せられたことは明かである。アブラハム言ふ、我れ此處にありと、我等も亦導かれたる低き柏木の一地點から御聲に對し、我等今此處に在りと答へ奉りて、全幅の信賴を献ぐると共に、各々重き或る使命を感ずるものである。神は次の如く小さき平信徒の單純なる信仰を透して語るを好み給ふ。我等は直ちに之を神の御聲として聽くの信仰と謙遜とを賜はりしを感謝するものである。我等祈らでは何事をも爲し得ずと叫んで、涙ながらに主の御衣の裾に縋る。

一、アンテオケ教會　山桝
一、エリヤ傳研究　大島
一、基督者の責任　大賀
一、基督を利用乎基督に奉仕乎　藤本（重）

全集編輯餘談　葉櫻が窓を覗く或る夏の日の午後、例の柏木の編輯室に獨危座して、曾て先生が多くの人に書き送られし愛の書簡の整理に當つて居つた。所感研究感想とは又別個の感に觸れる。其一枚々々に綴られし同情慰藉奬勵忠告等の緣滴の丘陵の起伏の間から、必ず秀嶺の聳ゆるものあるを發見して歡喜の胸を打つ、明治十四年より始まりしものは、今回は其卅四年度まで進んだ。不圖掌中に披きしは花卷齋藤云々の一通であつた。ア、是れ余に賜はりし二百餘通の最初の親書にて當時信仰の故に勘當を衣せられ居たる余を慰めん爲に書かれしものである。曰く、キリストを信ずるとは斯くも辛らきことに有之、然し之に伴ふの榮光も亦人の知らざる所に有之候其榮光を思ふて其困難を考ふれば後者は寧ろ數ふるに足らざる事と存候願くば君が

最終まで君の信仰を守り得て君の友人をして君に就て深く誇る所あらしめ給はんことを云々、眞に是れ余が過去三十二年間常に靈魂の奥に藏し來りしもの、今玆に新たに其の文を示されて到底雲烟過眼視することは出來ない。暫時冥默して歴史の階段を昇つて見た。成る程、キリストを信ずるといふ一事の故に、余は健康を失つた。職業を失つた。妻子を失つた。名譽を失つた。友を失つた。家を失つた。田畑を失つた。最早失ふべき何物もなきに至つた。實は余は何をも失はない。只余に不用のものを悉く神の御手に返還したまでゞある。基督の十字架の信仰を賜はりて余は無上の滿足と平安とを感じた。洵に内村先生の言は余に於て適中した。基督教、日本國、人類、宇宙のことゟ亦主に在りて先生の預言は必ず適中するであらうと、頭を擡ぐれば關東平野を壓する銀體金冠の雲の峰は、悠々其の雄姿を東京灣の方に移しつゝ、然り我も亦之を證明すと呼ぶものゝ如くあつた。余は再び事務に鞅掌。

親睦會　七月六日夕今井館に開會、教友の親睦を計る爲の集會ではない。主に賜はる兄弟親睦の愛心を表現し交換する爲の集である。教友相會して無音の雄辯を味ひ、靜肅の賑ひを感じただけでも一同の心は天に通ずるを覺ゆるのである。靈感の疏通を普からしめ、キリストの愛の結びを堅くせらるゝは大なる喜である。鈴木敏元氏司會、主の命じ給ふまゝに順序を進めた。讃美し祈り御言葉を味ひ且晩餐をも偕にした。老ひたる兄弟は昔を語つて笑ひと敬服とを招き、若き青年等は合唱を試みて拍手を起させた。教友持地氏い子女史の長き年月の間、廣き内外の地域に於ける苦心又感謝の實驗談は神の尊き攝理の眞意を明かにして感嘆禁じ難きものがあつた。是等少數の隱れたる人の祈と信仰的活動によつて、日本國の基礎が正義と愛との巖の上に築かれ行くは實に賴母しきことである。名古屋氏は女史の近著デンマーク見聞記に就き所感を述べて、是こそ眞にデンマーク國の核心を握りしものであつて、疲憊に喘ぐ我農村に力と望と平和とを與ふる唯一の書であると斷ずるに躊躇しないと言つた。我等も亦同感であつた。枇杷と櫻桃に咽喉を潤し感謝の心を歌にて捧げ、九時藤本氏の祈を以て裕かに祝福されし集會を閉ぢた。

金雞山下の一夜　民心の大勢は不信不德に陷り、日を逐ふて肉慾の奴隷化せんとする傾向は、單り我國に止らず全世界を見渡すも、北歐の一部を除いては悉く此恐るべく避くべく憎むべき趨勢に席卷せられつゝあるは明かなる事實

である。此時に當り一婦人の身を以て、心内の敵と戰ひ、周圍の試誘を斥け、複雜なる近親の問題を處理し、社會の濁流に抗して向上進展の途を邁往するものありとせば、我等は先づ彼女の行爲に於て、人間以外の强き力の活動を認めざるを得ない。余が主に在りて愛する池田姉は、此殊勝なる生活を東北岩手縣下に送りつゝあるものである。曾て其先代が平然として妓樓を營み來りしに、一朝靈感に打たれて聖書に全心を捧げ遂に贖罪の大恩に預るに至るや、斷然之を廢棄して旅舍の業に轉ぜしものを、彼女は之を引繼ぎて今日に至りしが、其間の苦戰の種類と程度とは推想に餘るものがあつた。然し彼女は祈禱の武具を振り翳して愛の勝利を續けることが出來た。今春更に光明への途を示され酒氣の誘ひ繁き旅館をも潔く廢業するに至つた。彼女は其晩年を聖書の研究、內村全集の精讀、二孫女の敎育に用ゐんが爲め奥州平泉の金雞山下に新居を設け、余に來りて献堂の祈を捧げんことを求めしを以て、余は編輯事務の間から二三日の時を割きて彼處に至り、彼女と共に惠まれし過去を感謝し、藤原三代の夢の如き榮華の跡に非ずして、異日眞詩人が夏草の褥に座してキリストの十字架の榮光を仰ぎし彼女の信仰の結實(みのり)を歌ふに至らんことを祈り、蛙聲の中に平和の一夜を送つて歸つた。

洗足會　農林省の渡邊兄が大阪轉任となつて別れ行く時には、我等は痛く惜別の情を感じた。然るに僅々數ヶ月にして再び該省に復歸すること、なつた爲め、前に比例する歡喜を以て迎へた。七月八日夜同兄の代田橋なる新宅に開會と決するや、當日雨をも暑熱をも意とせず引き付けらるゝ思を抱いて集つた。應急作製の長卓を繞つて十五名の信仰の友が對座せるを見し時には、何やら各自を支ふる生命力が波打ち一致の愛が翼を張つて、現世に類なき清淨境の觀があつた。心の貧しき者の祈る所語る所は互の胸を快く撫して、主よ御手もて牽かせ給へ、只我主の道を歩まんと歌はざるを得なかつた。司會者の命に應じて名古屋兄は感謝の祈を捧げた。尙居殘つて在佛の石河兄の爲に同情する兄弟等の姿も、泥の闇路を急ぐ大島先生等の姿も一種の輝さの裡に眺めることが出來る。昭和七年の日本よ、汝の爲に涙を絞る此等の人々の名を錄するを忘るな。

小國傳道　福音を傳へずば禍なりとの信仰に立ち、夙に恩師が海外より思を寄せし山形縣小國に對する愛の故に今夏も亦政池鈴木二氏は此境に入つて聖戰に身を委ぬる事となつた。我等は兩氏と此民の爲に祝福を祈るものである。

祖父の書翰（終）

江原萬里

私が此の稿を書いた動機は、幕末の所謂勤王の志士は大體どんな心情を以て働いたかを明にし度く思つた事と、一つは祖父が今日に至るまで、或る一部の人々から奸惡邪智の者と誤解されてゐる汚名を雪ぎ度く思つたからである。

私の此の稿は祖父の家を嗣いだ故鞍縣勇三郎君が多年心血を灑いで調査、考證の結果成つたその遺稿「文憲公年譜」及びその嵬集にかゝる書翰集に據つた。私は一度、之と祖父の書いた數十通の書翰及び論文を見て、始めて此の稿を書く氣になつたのである。

祖父は決して奸惡の者でなかつた。彼は鋭い才智を有し非常な活動家であつた。その書いた文章はいづれも優れて巧である。然し乍ら、私の心を動かしたものは、彼が誠心誠意、國を憂ひ、藩を愛し、君公に仕へ、又母を思ひ、友に厚かつた事である。私は彼の生涯を精査して、明治維新が如何にして成つたかを知つたのである。又古來父祖傳來の日本魂の如何なるものであるかを知つた。

祖父は明治四年、彼の三十八歳の時暗殺されて死んだ。若し彼が天壽を完うし得たならば、多分今少し多くの事を後世に遺し得たであらうと殘念に思ふ。明治維新以來、我國は西洋諸國の文物を採用し、その思想を取入れ、今では殆んど西洋化して、古き尊き日本の精神は殆んど全く失はれやうとしてゐる。而して之を遺憾として、日本精神の保存發揮に勤めつゝある者は、動もすれば固陋、偏狹に陷つてゐる。私は痛切に思ふ。現代は果して昔より以上に眞理を把握して居るか否かを。現代文明は果して正道を辿つてゐるものであるかどうかを。私は祖父の書いたものを閲讀しつゝ、此の疑惑の高まることを禁じ得なかつた。

私が祖父の書翰を讀んで感じたことは啻にそれだけではなかつた。私は意外なものを發見して驚喜したのである。それは祖父の歩んだ武士道こそ、眞に基督教を接木するに適する臺木である事の確證を得たこと之である。東亞の光である日本魂は、幕末既に世界の光を迎へやうとしてその準備は成つて居たのである。此の事は後に述べる。

元治元年八月、祖父は征長不可を再論後、自ら藩主に扈從して江戸に至らんとした。偶々津山藩の所領である瀬戸内海の小豆嶋に英國軍艦が來泊中誤つて島民を銃殺した。英艦はその遺族に僅かの物を與へて去つた。此の報に接し

て、祖父は大いに怒り、藩主の命を受けて、小豆島に渡り、事情を調査し、次で江戸に至り、幕府に之を訴へた。然るに幕府では英國を憚り、外國奉行は固循姑息、談判を容易に進めなかつた。祖父はもどかしがつて度々督促し、又關係諸侯を訪ねて盡力を乞ひ、遂に明年即ち慶應元年四月になつて、英國より償金として洋銀二百枚を得て落着した。當時諸藩中外國に償金を出したものは多かつたが、彼より之を取つたものは他にその例を聞かない。

此の時迄は祖父の意見は藩に重きをなし、藩は勤王黨として知られてゐた。然るに慶應元年以來佐幕論が盛んとなり、祖父は次第に疎んぜられるやうになつた。翌年彼は左遷の意味で一ヶ年間江戸邸在勤を命ぜられた。江戸邸には前藩主で今は隱居して居る德川十一代將軍の子である確堂がゐた。彼はその生立ちよりして勤王を悅ばなかつた。そして藩中確堂を奉じて再び之を藩主にしやうとする一派があり、之が實權を握るに至つた。

然るに一ヶ年間江戸在勤の筈のところ、居ること六ヶ月にして赦され、前將軍の諡號を奉じて津山に歸つた。前に掲げた河合惣兵衛未亡人に贈つた書翰は此の歸途認めたものであつた。然るに國に歸つて後も、祖父は藩政の實權から離れ、翌慶應三年は不遇の中に過した。彼は政治の方面に活働する事を得ず、專ら力を教育方面に注いだ。

其の頃津山の近郊なる院庄(見島高德が櫻樹を倒づて十字の詩を書いたので有名)に、島田馬之丞と云ふ者があつた。彼は病身にして家甚だ貧しく、その妻と娘の勞苦を見るに忍びず、一日酒糟若干を盜んで之を賣つた。直ちに發覺して彼は獄につながれた。此のため親戚は妻と娘を痛罵した。彼女たちはいたく之を悲しみ、遺書を認め、二人相擁して自刄して死んだ。その遺書に酒糟を盜んだ者は自分等二人である。然るに馬之丞はその罪を自ら引被つたのである。今死してお詫する。速に馬之丞を釋放され度しとあつた。

祖父は此の母子の貞烈純孝にいたく感動し、餘裕なき中から資を出して母子の遺書を一萬枚印刷せしめ、之を諸藩の知人に配布した。その爲め京都の朝廷にも聞え、又横濱の外人も之を讀んで、日本にはこんな婦人がゐるかと感嘆した。彼は友人の感想文を集錄して、明治二年に鳴鶴餘音と題してその前集を出版し、更に後集出版の準備成つたが、明治四年不慮の死によつて果さなかつた。

祖父は又此の母子の善行を永く後世に傳へるために自ら碑文を撰し、碑を建てやうとした。此の事が藩主に聞え、

藩で建設することゝなつた。何故かくまで祖父が此の母子の行に感動したかは自ら撰した碑文に明かである。

その碑文に祖父は云ふ。自分は和漢史に此の母子の例を求めたが、義のために身を殺し、死して名を潔くした者はいくらでもある。然るに此の母子の如く、一身に罪惡を負ひて夫を救ひ、從容として死に就き、一毫も名を潔くするの念なき者は、曠古未だ嘗て有らざる也と。之が祖父を痛く感動せしめた理由であつた。私は之を讀んで、若し祖父がキリストの十字架を知つたならば、どんなにか深く感動し、贖罪が最高の道德であることを敎えられたに違ひあるまいと思つた。祖父は孔孟の敎により身を處し、尊王攘夷で終止した。然し彼の心には旣に基督敎の植えらるべき最も善き苗床が出來てゐたのである。私は武士道こそ基督敎を接木し得る最上の臺木である實證をこゝに得た。

翌年は慶應四年即ち明治元年である。幕軍は伏見、鳥羽に敗れ、慶喜は海路江戸に走つた。全國に於ける勤王黨は盛んとなり、祖父も亦久しく不遇の境より出て、大目付となり、藩政に關與する事となつた。祖父の不遇中德川の親藩である津山藩は勤王黨に疑はれた。されば長州及び岡山の兩藩は兵を國境に進め、津山藩の向背を詰問して來た。此の時祖父は京都に在り、天朝に「闔藩貳なき事を奏し」、急ぎ歸藩、「大義滅親」の藩論を確定し、長州及び岡山藩に答へて、終に事なきを得た。

やがて大政奉還となつた。彼父は明治二年津山藩の權大參事となり、議事局議長を兼ねた。此の頃も引續き藩中には明治維新を喜ばない前藩主確堂を奉じて自分等の位置を進めやうとする一派があつて、之との軋轢が相當あつたものらしくある。殊に此等は新參者なる祖父が藩の齊權を握る事を好まなかつた。祖父は勤めて謙遜に身を持し、大目付となり、又權大參事となつても、少しも誇るところなく途にて步卒等が土下座するをきらひ、自分の方から避けて步いた。

明治四年、祖父三十八歲の時、民部省出仕を命ぜられ、東京に出た。やがては大政太臣三條公の內意により、大藏省の大少輔に就任する筈であつたそうである。偶々此の年七月、廢藩置縣令が發布せられた。彼父は津山藩の民心動搖を氣づかひ、賜暇を得て東京を發し、八月二日明石に到着、こゝで知事即ち舊藩主の訃を聞いた。西歸日に

船大阪を發し明石に下る……正四位公、廿六日を以て永逝せらる。此東京出發の前夜、危篤の報を聞き、

既に其の此の如きを知り難かりき。尙、速に歸へり、其の面を拜せん事を希ひしに能はざりしなり。噫。是より心喪ひ、斷つて肉食せず。

津山に歸へり居る事約一週間、八月十二日請暇の期迫りたれば歸京せんとて、其夕親交あつた河瀨重男を訪ひ、公私談論數刻、供の者を先づ歸へし、夜更けて自分獨り辭して玄關を立ち出た。彼が十數間先の門に差しかゝつた時、前方より何者か銃を以て狙擊され、彈丸は腹部に命中した。氣丈であつた祖父は、取つて返へし再び友人の宅に入り、後事を彼に託してそこで死んだ。嫌疑者を引致して取調べたが犯人は遂に不明に終つた。

生前祖父と親交のあつた矢吹正則撰、祖父の略傳附錄に、

鞍懸氏ノ津山ニ仕フル僅ニ十年、而シテ大率國事ヲ以テ他出ス。偶々家ニ歸ヘルヤ、文人墨客競ヒ來テ詩書を講ズ。而シテ國事ヲ談ズル者アレバ直ニ机ヲ去リ、士庶ヲ論セズ、之ヲ一室ニ延キ、談論親密、褒貶ニ涉ラズ。過失ニ失セズ、能ク所說ヲ聞キ、徐ニ其是非ヲ判シ、丁寧反覆之ヲ指導セリ。故ニ當時地方勤王家皆氏ヲ以テ首領トス。遭難ノ日置郵ノ便ナク、各地訃ヲ聞キ、弔書ヲ寄スルモノ殆ド半歲空日ナカリシト云フ。

遺子四人。皆女子、その次女が私の母である。妻即ち私の祖母は、かねと云ひ、大阪天滿與力の養女　祖父が赤穗藩を追放せられて大阪に行つた時結婚したのである。彼が東京にて零落し、賣卜までした時も、よく苦難を伴にし、或る時は南部侯の乳母となつて子女を養つた。祖父が津山藩に召され、直ちに京都に駐在を命ぜられ、東奔西走殆んど家に居なかつた時も、よく家を治め、祖父死して後もよく氣むづかしかつた姑に仕へ、四人の子を養育した。殊に姑は數年間中風にて起居不自由だつたが、よくいたはり、車をつけた箱を造つて之に乘せ、自ら之を牽ゐて私の宅を訪ねたりした。私の生れた明治二十三年、姑死し、その冬祖母も亦私の家で急死した。その一生は全く犧牲奉仕の生涯であつた。次のやうな褒狀が遺つてゐる。

士族鞍懸勇三郎養母　　かね

平生孝貞ノ志厚ク、夫寅二郎曾テ兇手ニ斃レ、兩來寡婦ノ身ヲ以テ、家計ヲ維保シ、姑美起ノ宿痾ニ罹ルヤ、日夜克ク看護ヲ盡クス等、十有餘年一日ノ如ク、志操ヲ變セサル段、奇特ノ義ニ付、木杯三ツ組下賜候事。

明治十八年五月廿六日

岡山縣令代理　岡山縣書記官正七位高津暉郎

福音の奇能

私が語る福音を卒直に聞き、私と同じやうにキリストを信じた人々の感想を聞くと、何よりも先づ心の平安を感じたと云ふ人が多い。今まで何かしなければならないと心に責められ、又世の不安に心を惱まされて居たのが、福音としてキリストを信じて、一切の此の不安焦慮が去り、重荷が取除かれ、晴々した氣持ちになつたと云ふ。私はこれが信仰生涯の正當なる第一歩と思ふ、パウロがロマ書で信仰の義を說いた直後、「斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我等の主イエス、キリストに賴り、神に對して平和を得たり」と云つたのはそれである。キリストを信ずる時先づ此の「凡ての人の思念にすぐる神の平安」が我等の心と思とに臨むのである。(ピリピ書四・七)。之こそは福音の奇能である。他の何者か斯る者を我等に供し得やう。

此の平安あり、胸中難局と戰ひ得る餘裕が生ずる。勇氣が湧き出る。即ちパウロが前揭ロマ書で續いて語るやうに「然かのみならず、患難をも喜こぶ」に至る。由來人間の天性は快樂を好み、苦痛をいやがるものである。然るに一度キリストに在る平安を味ふや、患難を喜び、自ら進んでキリストのために世の恥を忍び人のために己を犧牲にしやうとする。此の人間性の變化、これこそ福音の奇績である。

私の集に來るやうになつてから、今まで無性に好んだ大酒がピッタリ止み、今では飲む氣がしなくなつたと云ふ人がある。家族の人は家庭が明るくなつたと感謝し、友人は人が變つたと云つて不思議がつて居る。つい數日前も、ある人が彼に會つて人相がすつかり變つたと驚いて居た。此の變化は意志の力に由つたのではない。修養では出來ない。我等の知らぬところに働く福音の能力である。こんな力が福音に在る事を知つて、今更に驚き怪しむのである。

又私の集に來る婦人で、自分が信仰の何であるかを最も明白に知つたのは、私の聖書の講議よりは、昨春私が喉頭結核の診斷を受け、聲が涸れて講義が不可能なとつた時、集をやめることを人々に筆談し乍ら、私の顏が輝いて居たのを見た事だと語つた人がある。此の平安と喜悅とは支へ作つては出ない。キリストを信ずる時、何者か大なる力がるから出る。之が普通に死の宣告と見られる病患を征服せしめる。再起の力なしと思はれる事業の失敗にも屈せず、沮喪した意氣を再び回復し、遂に新境を開拓せしめるのである。今の日本に最も必要なのは此の福音である。

制度と社會的行動

我等が氣まぐれに生きない限り、我等の行動には一定のきまりが出來る。例ば、朝起き、毎日出勤し、一定の業に就き、日曜日は休み、夜は眠る等。又我等が他人と没交渉に山中にでも住まない限り、必ず他の人との間に一定のきまりが出來る。例ば、我等は家族生活をなす。家族は一所に住み、各自仕事を分擔し、誰かゞ戸主となり全家の責任を負ふ。此のきまりを制度と云ふのである。我等の生活が複雜となり、各人の交渉の範圍が廣がり、且つ行動の目的を全じうする時、各種の團體とその集會とが生じ、そこに一定のきまり、即ち制度が出來る。此の制度の下に、社會的活動をするやうになる。

此の制度は必要である。制度のない社會は、身體のない靈魂のやうに、それは幽靈である。我等はそれを考へることが出來ない。例ば、現代社會は私有財産制度を根幹として居る。若し他に何の之に代る者を供せずして、此の制度を全廢して見よ。動機と目的如何に拘はらず、各々氣紛れに他家に泊り込み、家財を持出し、工場の機械を使用し、銀行預金を引出したら如何、社會は存立しない。

私は月二回朝十時から聖書を講義する塾を有つ。此の制度があるから、私の聖書講義と云ふ社會行動が續けられるのである。之を續ける限り此の制度は必要である。制度は生命を宿す身體である。之に由つて生命は外に顯はれる。

精神と制度との關係は生命と身體との關係である。身體は生命を宿す、然し乍ら身體を發達せしめる者は生命である。頑健なる身體は生命を盛にするが、生命が衰ふる時壯健なる身體も亦衰へる。例ば常に聽衆堂に滿ち、講堂の設備整へば、私の熱心は勵まされるであらう。然し乍ら、此に賴る時私の聖なる願望は消え、生命はなくなり、講堂も衰ふ。然るに私の生命が聖化される時、それに副ふ身體が與へられ、重苦しい肉體が其の中に包藏する靈魂を宿すに堪えざる時は新に榮化せる復活體が與へられる。その如く内なる精神は制度を變へる。

それ故に、私は制度をなくするために現存教會を攻擊しない。各基督者の社會的行動の聖化を願ふ。若しそれが出來たならば、今あるやうな賤しい教會制度の代りに、キリストの眞生命を宿し奉るに相應しい聖なる身體、之を形成する信仰的行動のきまりなる美はき制度、眞善美の溢れる聖會が出現しやう。

身邊漫筆

○私の家では小さい子たちの熱心で家庭聖書輪讀會が續けられて居る。子供がこんなにまで聖書に興味を有つと云ふ事は私には驚異である。毎夕「聖書をしやう」とせがまれて、父と母とは勞れて居ても、その熱心に誘はれて「聖書をする」。多分之が私たちが小さい子に遺す唯一の善きものとなるであらうと思へば、大きな喜である。私たちは子に財産を遺す事が出來ず、彼等の欲する物を買つてやる事も出來ず、充分なる教育を授ける事も出來ないかも知れない。されど若し彼等に聖書に在る生命を遺したならば、恐らく此以上の富を彼等に與へ得ないであらう。此の富こそは私の與へ得る唯一のものである。

○輪讀會は小さい卓子を繞つて親子五人、祈に始まり讃美歌を歌ひ、それから一章程を各自分讀し、私が簡單にその章の大體の意味を語り、一同讃美歌を歌つて會を閉ぢ寢に就く、其の間約半時間。子たちがイエスの爲された事に對する感興は驚くばかり。イエスの憐憫と能力、癲癇病人を憐れみて手をつけて之を癒し、暴風中舟で安眠をし、只一言を以て荒波を鎭め給ふイエスの御姿を、彼等は豐富な想像力に由つて思ひ浮べ、今鎌倉の街を歩み、由井ケ濱で漁夫と語り給ふ樣を想像する。

○カイザリヤ、ピリピの村でのペテロの大表白の箇所に來た。私はイエスに倣つて子たちに、「一體お前たちはこんな偉い事をなさる此のエス樣を誰と思ふ。私達と同樣の只の人間と思ふか」と聞いた。子供は言下に「只の人ではないね、神樣だね」と答へた。現代の聖書學者に感じられないセンスが小さき子供にはある。彼等の眼に映ずる聖書のエス樣は明に神樣である。

○イエスは今尙我等に「なんぢらは我を誰と思ふか」と問ひ給ひつゝある。人は皆その答に由つて己が生涯の意義が定まるのである。或は宗教的天才、世界最大の聖人、又或る者には一個の宗教狂、阿片の喫吸者、又或る者には近所の熊公八公と大差なき凡人。然るにイエスは勝手に批評せしめ、己につき他人の證しを求め給はなかつた（ヨハネ傳二章）。只何の成心もなく、單純に聖書を讀んで彼の言行を受容れる時、私の子たちのやうに思はず「神樣だね」と云はねばならなくなる。

○基督者は皆自分の信仰は聖書的であると主張する。私は未だ嘗て聖書的でない基督教のあつた事を知らない。只奇體な事には、古來一冊の聖書に據つて互に他を異端として爭つて來た事である。現代の根本主義者と近代主義者の爭も、各自聖書を自分の側に置いて他を論議して居るのである。彼等は皆自分に都合の良いやうに聖書を解釋し、これが聖書の基督教であると主張するのである。

○それ故我等は必らずしも聖書學者の聖書の解釋に追從する要はない。單純なる子供の心を以て自分で聖書を讀み、そこに有り有りと現はれ給ふ我等の救主イエスの御姿を仰ぎ見、彼の御言に服ひ、我等の日々の生活經驗にその恩惠を味へばよい。少女マーガレットは博士ファウスト以上に神を知つた。

○此の意味で家庭に於て子供たちと一緒に聖書を讀む事は私達の信仰の大きな益である。何の注釋書にも賴らず、子供の解するやうにエス樣を、エス樣と解し、彼の御言を信ずるのである。此のエス樣が家庭に在し給ほゞ、假令其の家に財産はなく、名譽と地位となくとも、其の家に將來がある。その子孫に光榮がある。子に何を遺さうと思ひ煩ふ要はない。聖書の眞理を傳へよ。

山谷省吾著（長崎書店版）

新約聖書・新譯と解釋

コリント前書

總布裝函入
定價 一圓五十錢

曩に著者畢生の繼續事業として、深い信仰と廣い學問との平易化を目的として、本書第一卷を世に提供された著者は、今第二卷として之を出された。私の散讀するところに由れば、著者の研究は益々進み、信仰も亦益々福音の核心に觸れて確實明瞭となり、聖書本文の譯は益々流暢になつたやうに思はれる。近來の快著として紹介し度い。

因に著者が最近佐藤繁彦君のルッター研究誌上に寄せられた「最近の獨逸神學に於ける神觀の變遷」は、私が近頃讀んだ日本文で書かれた此の種の宗教論文中最も愉快を感じたものであつた。（獨立堂にても取扱ふ）

江原萬里著

聖書的現代經濟觀

定價 一圓二十錢
送料 八錢

本書は廣く讀まれず、深く讀まれて居る。數日前にも某氏來訪、本書中の「士族の商法」を主義として目下の不況と戰ひ、商買には有害無益と云はれて居る今時、此の主義の實際的證明をするため斷然廢業を思止まり、新なる決心で事業を讀けると語らる。著者としては大なる感謝である（聖書の眞理社取扱）

向山堂新刊書

金澤常雄著
永遠のキリスト
定價 二十錢
送料 二錢

坂野龍雄著
禪と基督教
定價 四十錢
送料 四錢

東京九段坂
向山堂書房
振替東京六二七三二

主筆の講義

毎月第一水曜日午前十時
ヨハネ傳講義

第三日曜日午前十時
イエスの生涯
（外、山田幸三郎氏の聖書講義）

○本誌讀者は聽講出來ます。但し謝禮の意味で白銅か、銀貨かを玄關側の籠に投入さるべし。

○前記當日及び前日又本誌の編輯日なる毎月十日から五日間は特別の用事なき限り、來訪を御遠慮下され度し。

聖書の眞理定價（送料共）

一部	二十錢	
半年（六部）	一圓十錢	
一年（十二部）	二圓十錢	
一年半（十八部）	三圓	
海外一年	二圓六十錢	

拂込は聖書の眞理社（振替東京六三三七五番）へ。獨立堂にてもよし。

思想と生活合本

送料不要

二三年度	第一卷	二、〇〇
四年度	第二卷	一、八〇
五年度	第三卷	二、三〇

聖書の眞理合本

六年度　送料不要　二、五〇

全四部注文の場合は六圓に割引す

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三
編輯印刷
發行人　江原萬里
東京市外澁谷町向山九七
發行所　聖書の眞理社
東京市神田區表猿樂町一九
印刷所　共榮堂印刷所
東京市外淀橋町柏木九四六
發賣所　獨立堂書房
振替東京一九四六六番

（昭和三年二月十六日第三種郵便物認可）　聖書之眞理　第五十八號　昭和七年七月二十六日印刷納本　昭和七年八月一日發行　（毎月一日一回發行）

本誌定價二十錢